西本　良三さん

71 年に柔道隊員としてケニアに派遣される。帰国後は県立高校の体育教師となる。82-87 年、滋賀県教育委員会の保健体育課に配属され、86 年には滋賀県海外協力推進調査団としてタンザニア・ケニア・マラウイを訪問する。00 年には草津東高校教頭、03 年には水口高校校長となり 09 年、定年退職。今年度から県立体育館の館長を務める。

教員採用合格を辞退してまで参加した協力隊

大学卒業後の 71 年、ケニアに柔道隊員として派遣されました。当時は応募が非常に多く、右肩上がりにのびているような状況でした。また当時、「青年海外協力隊」とは言わず「日本青年海外協力隊」という呼び名でした。協力隊に応募すると同時に実は、滋賀県の教員採用試験も受けていたのです。教員採用試験の合格通知が届いた後に、協力隊の派遣も決まったのですが、最終的には協力隊に参加することにしました。協力隊への参加の思いが、強かったのです。

楽天的な自分に合っていたケニア

柔道の技術を伝えるのはもちろん、サッカー、ボクシング、空手とできることはなんでも挑戦しました。けがはしょっちゅうしていましたが、仕事以外にもバイクや車で出かけたり、いろんな事をやっていました。とうもろこしの粉の団子、やせた牛のかたい肉、南瓜や胡瓜などの食事も自分には合いましたし、住居も恵まれており快適に過ごしていました。

物がない中でも工夫してできる喜び

柔道を教えるのに柔道着もたたみがないといった状況でした。しかし、ロープをたすきがけのようにして柔道着代わりにつかったり、木の枠におがくずをしきつめ、水でぬらしかためて作ったものをたたみ代わりにしたりしていました。モンバサで設計からすべて行い、柔道場を建てたときには材料の調達、資金の工面など考えなければならないことが沢山ありました。労働力は勤務先の囚人。思うようにことがすすまず困ることだらけでしたが、困るのは答えが出る前の状況なのです。困ったときには必ず答えがでます。日本では 1 年でできるところが倍以上の時間をかけてやっと完成させた柔道場でしたが、やり遂げたときはとても嬉しかったです。

全て一から手作りで、現地の人と共につくっている柔道場

体を張って、認められた

現地で柔道のデモンストレーションをするとき、コンクリートのような床の上ですることが多かったです。大技の時には気絶していました。足もはれました。ナイロビは高地ですが、そこでオリンピックのメダル級の選手たちと長距離のトレーニングを一緒にしました。彼らにとっては軽いジョギング程度でもこちらは気絶寸前です。それでも、スポーツマンとしての意地とプライドで必死についていきました。身をもって彼らと一緒に汗を流したことで、彼らからも認めてもらえた、そんな気がしています。

黒帯をめざしてよく頑張った看守たち

活動中のジレンマ

スポーツや文化は国の経済が安定してこそできるもの。才能がある人物に伝えたい、教えたいと思っても働くことが優先される途上国ではそれができない。柔道隊員だからこそかかえるジレンマでした。

かけがえのない 3 年半を過ごせた

自分がケニアで築いたものを確実に引き継いでくれる後任を探しながら、延長もした活動でしたが、結局後任が見つからず 3 年半で帰国しました。日本からはるか遠くの、アフリカにいけたこと、途上国の発展に関わることができたこと、協力隊活動を通して職業観ができたこと、社会学的な国際感覚が身についたこと、またそのおかげで外国人との交流に全く物怖じしないことなどは協力隊活動で得た、大きな財産となっています。

協力隊に参加してこそ選んだ教師への道

協力隊に参加する前に一度は辞めた教師への道でしたが、協力隊の活動を通して考えたこと、見えたことがありました。日本は資源の無い国。日本に唯一ある人的資源、これを磨くことができる教師はなんてすばらしい職業なのだろう、と思ったのです。これが、あきらめずに教師に再チャレンジした大きな理由となりました。教師は自分の天職でした。協力隊で身に着けた人と接する力を存分に発揮できる職業でもあります。自分の教え子に自分のバトンを渡せる。自分の教え子が自分と同じ教師や協力隊の道をたどってくれたときには最高の喜びを感じます。

長い年月を経て思うこと

協力隊に参加して、理想は、自分が作ったものが継続されることではないでしょうか。でも、それは本当に至難の技。今は、そこまでいかなくとも、協力隊参加の一番の意義はおのれ作りにあると思ってもいいのではないかと考えています。協力隊に参加してから今まで、仲間と共にＳOCA をたちあげたり、帰国隊員に話をしたりしてきました。直感にしたがって無理せず海外とつながりながら活動できてきました。教師なら、生徒に返せるタイミングが必ず来るので焦らず待つことです。たこの糸のようにゆるめたりひっぱったりする力が大切なのです。時がきたら必ず自分のやってきたことを返していけるはずです。協力隊発足当初に活動し、個性的な人たちと出会ってから今まで、実に多くの出会いをしてきました。その出会いにはそれぞれつながりがあったりして、目に見えない力のようなものを感じています。協力隊の初期に参加できたことを本当に良かったと思っています。

（OV 訪問の感想）

帰国後 2 年たちますが、焦って疲れていた私には「焦らなくても必ず、自分のやってきたことを返せるときがくる」という人生の先輩の言葉はとても心に響き、勇気づけられるものでした。発見と新たな出会いがあり、訪問させていただけて本当に良かったと思います。

（大森　比呂子）

同じ教員という目線と立場でのお話で、刺激的な訪問でした。協力隊時代を「自分づくりの時期」と言われたことは、教育につながると思いました。「大変だった」という言葉はなく、困っていたことも含めてすべて楽しまれていたことが印象的です。今後私も大きな視点と心で、取り組んでいこうと思えた有意義な時間でした。

（嘉本　有里子）

県立体育館にて OV の西本さんと